

対話である越境 : オープンダイアログ、討議倫理、あるいは哲学カフェの可能性をめぐって

著者	五十嵐 沙千子
著者別名	IGARASHI Sachiko
雑誌名	哲学・思想論集
巻	42
ページ	64(55)-46(73)
発行年	2017-03-28
その他のタイトル	Open Dialog, Socratic Dialog, Harbermas' Communication Theory
URL	http://doi.org/10.15068/00145930

対話である越境

——オープンダイアログ、討議倫理、あるいは哲学カフェの可能性をめぐって——

五十嵐 沙千子

「対話の重要性」というフレーズが溢れている。対話型授業、国際対話、企業間対話、対話による人材育成やマネジメント、官民対話、哲学対話、宗教間対話、サイエンスカフェ、ジョブカフェなど、対話はもはや私たちの顔を合わせたおしゃべりという日常的な場を超えて国際／国内政治の利害調整、利益を求める企業経営や生徒に知識を教える学校の授業など成果志向的な場でも使われる現代の主要なツールとなっている。

だが、こうした「対話」の場所で、対話は真に生起しているのか？

例えば「対話型授業」をするために生徒に発言「させ」なければならないと考える教師¹や、施政方針についての一方向的な「説明」を与える「官民対話」、スタッフに規律と「やる気」を内面化させるための企業ミーティングなど、「対話」が使われている例はどこにでもある。そこには明確な「目的」／「正解」が設定されており、その目的への誘導者と被誘導者が自明の上下関係として存在している。そこに貫徹しているのは、対話の相手を一定の方向に誘導していこうとする目的合理的＝成果志向的な誘導者の意図である。

この「対話」は対話なのか？

だが、ここに対話が真に生起しているかどうかは別として、少なくとも上のように「対話」を冠する場がいたるところで持たれているという事実は、対話が現代において正統性を保証するツールになっているという暗黙の了解が共通のものになっていること、あるいはもしかするとどこかに／おそらくわれわれ自身のなかに対話への希求があることを示しているように思われる。

対話とはいったい何なのか。

対話が生起するとはどういうことなのだろうか。

ここに、ある意味で最もシビアな「成果志向的」な場において対話が生起しているひとつの例がある。しかもそこでは対話が目覚ましい「成果」をあげ、場のパラダイム自体を劇的に変える可能性を開いているというのだ。それはこれまで投薬に絶対的に依存するしか治療の道がないとされてきた、ある深刻な病気の医療の例である。

その治療法は「オープンダイアログ」と呼ばれている。

六
四

1 オープンダイアログ

オープンダイアログとは、1980年代からフィンランドの西ラップランドにあるケプロダス病院を中心に行われてきた、最重度の統合失調症を含む多様な精神疾患に対する治療・ケア技法である。この治療法を日本に紹介した斎藤環によれば、この技法で「具体的

に何をするのかと言えば、危機的状況にあるクライアントの自宅に専門職のチームが赴き、危機が解消するまで毎日会い続けて対話をする。これが「ミーティング」といわれるものですが、基本的にこれだけ²⁾だという。石原孝二が言うには「ミーティングの最中、セラピストは記録を取ることもなく、世間話のようにミーティングが進められていく。ミーティングの内容を誰が報告するのかは決まっているとのことだったが、話の内容を細かく報告するというだけでもなさそうだった。…略…治療ミーティングは全体としてあまり構造化されていないようだった³⁾らしい。それにもかかわらずこの治療法は「いま世界的に注目されている治療・ケア技法⁴⁾」であり、「もしこの考え方が広がれば、日本の精神科医療のあり方が大きく変化せざるを得ない⁵⁾」ほどのものとされる。それはもちろん、「このシンプルきわまりない技法が、抜群の治療成績を上げている⁶⁾」からに他ならない。斎藤環によれば、精神科医の間ではこれまでずっと、統合失調症だけは薬を用いなければならぬ病とされ、「どれほど精神療法志向の医師でも、統合失調症だけは薬物療法が必須であると考え⁷⁾」ることが「精神医学において専門家なら誰もが合意する数少ないハード・ファクト⁷⁾」だったという。それなのに「ただ話すだけ」のオープンダイアローグの技法が「最も重篤な精神疾患に対する危機介入のあり方⁸⁾」として従来の治療法を圧倒する著しく高い治癒率を挙げているのだ。この事実は、これまでの「常識」を完全に覆してしまう。

なぜ、この「世間話のように」「ただ話すだけ」の対話が人を治癒に導くのか。

それはもちろん、このオープンダイアローグという技法が実は「ただ話すだけ」の「世間話」ではないからである。

オープンダイアローグの中心にいるヤーコ・セイックラ (Jaakko Seikkula) によれば、オープンダイアローグには2つの重要な支えがある。「詩学 (poetics)⁹⁾」と「マイクロポリティクス (micropolitics)」である。

「マイクロポリティクスとは、この手法を支えている制度的な側面のことで、フィンランド政府が実施しているニーズ適合型アプローチの一部をなすもの¹⁰⁾」である。具体的に言えば、オープンダイアローグという治療アプローチはフィンランド政府の公的医療サービスに組み込まれており、無料で治療が保証されているほか、一貫した質の高い職員教育によってオープンダイアローグの維持が保証されている¹¹⁾。この「マイクロポリティクス」によってオープンダイアローグが制度的に支えられているとすると、オープンダイアローグの本質を支える内容の原則が「詩学」である。

この「詩学」の3つの位相をセイックラは次のように言う。1 不確実性への耐性、2 対話主義、3 社会ネットワークにおける〈ポリフォニー〉である。

まずはセイックラが説明するオープンダイアローグの描写からこの三つの相を探していこう。

オープンダイアローグの基本はミーティングです。危機的状況に対して素早く支援するため、ミーティングは依頼を受けてから24時間以内に開かれます。危機対応チームは病棟と外来のスタッフから構成され、ミーティングは可能な限り患者の自宅でおこなわれます。患者本人と危機対応チーム、そのほかの重要な関係者全員（親戚、友

人、他の専門家など)の参加が求められます。ミーティングでは、全員がひとつの部屋で車座になって座り、その場で自由に意見を交換することができます¹²。(傍点引用者)

まず注目すべきなのは、ここで「全員」「車座」という概念が使われていることである。「全員」と「車座」は以下のように用いられている。

治療や薬物、あるいは入院にかかわる事柄は、必ず全員がそろった場で話し合わせ、決定されます。治療に関して、スタッフ限定のミーティングはありません¹³。(傍点引用者)

すべてのやりとりは透明性が保たれています。そこには入院の決定、薬物を使うべきかどうか、個人精神療法を取り入れるかどうか、なども含まれています¹⁴。

ケースに関係する会話や決定が、ネットワークメンバーのいないところでなされることはありません¹⁵。

オープンダイアログでは、患者をはじめとする家族、友人、親類などを「ネットワークメンバー」と呼び、医師を含む治療側のスタッフを「治療チーム」と呼ぶ。オープンダイアログにおいてはこれら「全員」がオープンダイアログの当事者であり、治療方針や進め方はこの「全員」で決定される。この「全員」が当事者として対話し、共同ですべてを決定していくやり方は、「医師」が「患者」を診断し治療していく通常の医療とは全く異なるものである。斎藤環によれば「原則として、話し合いの最中には、スタッフとクライアントのあいだにもはっきりした区別はもうけません。…略…重要なことは、オープンダイアログにおいて「専門性」は必要ですが、「専門家が指示し、患者が従う」といった上下関係は存在しない、ということです。オープンダイアログとは、専門家と患者が、完全に相互性を保った状態で対話することなのです¹⁶」という。「車座」がまさにその象徴である。円には上下がない。患者と治療方針をコントロールする権力はここでは排除されているのだ。「医師→患者」という一方向的関係において与えられる「診断」「治療」はここではなされないのである。こうしてオープンダイアログにおいてはただ現場の対話が続いていく。診断もジャッジも与えられない不確実な中で参加者すべての対話という循環が延々と最後まで、つまり危機が解消されるまで続いていくのである。

セックラは言う。

危機的状況が突きつける「いま何をなすべきか」という問いについては、対話そのものが答を出すか、そもそもの問題がなくなってしまうまで、回答は保留されます。すぐに助言したり結論を急いだり、従来どおりの介入手段に訴えるやり方では、安全と信頼の確立はおろか、精神的な危機の真の解決にはつながりません。予断や憶測は、ことのほか避けるべきです。なぜならそれは参加者を沈黙させ、自然な解決方法を見つげにくくするものだからです。治療者は、問題についていかなる予断も持たずに、対話そのものが新たなアイデアや物語をもたらすことだけを願って対話に参加するのです¹⁷。(傍点引用者)

オープンダイアログにおいては「医師」が診断するのではない。「対話」のなかから答が生まれてくるのである。「医師」が治療するのではない。「対話」が癒すのである。これを「対話主義」とセイックラは呼ぶ。対話主義の空間において「治療チーム」が行うのは対話を起こすこと、そしてそれを維持することである。(→「対話主義」)

だが、この対話主義の前提の中で、「こうすればこうなる」という確たる診断や治療の道筋も与えられず「医師に従っていきさえすれば治療してくれる」という依存関係も持てない不確実性の中でひたすら対話を続けていくというプロセスは、クライアントにとっては辛いものだろう。逆に、医師にとっても、鮮やかな診断や治療手腕を示して患者を導くことを禁じられたまま先の見えない不確実な対話を続けていくことは医師としてのアイデンティティを揺るがすことでもあるだろう。だが、この「不確実性への耐性」がなければオープンダイアログは成立しない。(→「不確実性への耐性」)

しかし、オープンダイアログのこの「不確実性」を耐えていく力もまた、対話によってもたらされるのである。

臨床場面において「不確実性への耐性」を支えている要素は、何度もミーティングをすることと、対話の質を高めることです。家族が危機のなかで孤立していると感じないように、十分な頻度で—必要があれば毎日—ミーティングの機会が持たれることになります。……重大な危機の場合は、10～12日間にもわたって毎日ミーティングをおこなうことも考慮に入れます。深刻な危機に際しては、治療者と家族は一定期間、危機の状況がはらむ曖昧さと格闘しなければなりません。それを可能にするのが対話です。対話こそが、迷宮から脱するための「アリアドネの糸」なのです¹⁸。(傍点引用者)

こうして対話が続けられていく。それは従来のパターンリズムではない、おそらく現代のインフォームドコンセントという「対話」の地平さえも越えた、常識的に想定されるような医師と患者の質問-応答型の「対話」を廃した、テーマも決めず方向性も決めない、対等で相互的な対話である。

だがそれが「治療」なのだ。

ミーティングにおける治療チームの重要な仕事・・・こういう対話は、あの古くさい一問一答、つまり患者から情報を引き出し介入の計画を立てるための「問診」とは似ても似つかないものです。対話の形式そのものが「介入」となる、といってもいいでしょう。対話において治療チームがすべきことは、対話を通じたつながりが生まれてくるスペースを、できるだけ多くつくり出すことなのです。介入の対象は対話そのものであり、患者や関係者ではありません¹⁹。(傍点引用者)

治療チームは「患者や関係者」に介入するのではなく「対話そのもの」に介入するのだ、とセイックラは言う。それは「対話の形式そのものが「介入」となる」と考えられているからである。治療チームが患者/関係者に介入するのではない。治療チームは患者/関

係者を取り巻く「対話」に介入する。そしてこの「対話」が病を癒すのだ。だから治療チームの仕事は「対話を通じたつながりが生まれてくるスペース」を作り出すことに向けられる。

別の言い方をすれば、患者は彼自身を取り巻く「対話」のなかで病んでいる / 病んだ「対話」のなかに患者は棲んでいる / その「対話」に介入し調整することでそこに棲む者の病が癒える、ということになるだろうか²⁰。このことは、なぜオープンダイアログが患者だけでなく患者を取り巻く「ネットワーク」全体を「治療」の対象にするのかを示している。その「ネットワーク」がまさに病んだ「対話」の網を構成しているからである。

患者 / 関係者が棲んでいるこの網こそ「モノログ」の空間にほかならない。

モノログ的な対話とは、話し相手にお構いなしに、自分自身の考えやアイデアを一方的に語るものです。この発話は別の発話を拒絶することになります。ダイアログ的な対話においては、先立つ発話に答えるべく新しい発話が構成され、これに続く答を待ち受けます。こうして、話者たちのあいだで新たな理解が形成されるのです²¹。

複数の人々がいても、あるいは複数の人々が話していてもその場がモノログ的空間になっている例は多い。一人だけが話すこと、誰かが「一方的」に語ること、彼の想定で / 彼の「正解」に向けて / 彼のルールを進まなければならない空間になっていること、その「一方向的な話」だけが許されること、「別の」ルール / 「別の」声²²が拒否されていること、そこでの「話し方」が決まっていること、話す「内容」が決まっていること。それはどこにでも見られる風景であると言ってもよい。

だがこのモノログ的空間で人々は「受動的な存在」にされているのだ。そこには支配があり、服従がある。たとえその場に直接「支配する彼」が存在していないとしても、そこに一つの想定 / 一つの「正解」 / 一つのルール / 一つの「話し方」 / 一つの「内容」しか許されないとしたら、直接の支配・命令がなくても自ら暗黙のうちに服従する人々がいるとしたら、自分自身で「受動的な存在」であることを自らに選んでしまっている人々がいるとしたら、そこは「支配された」空間 = モノログの空間である。「別」の発話は拒否されている。拒否されている声があるのだ。あるいは自らの「別」の声²³を拒否している / 自らを「他者」にしてしまっている人々がいるのである。

この「別」の声、拒否されている「他者」に対話を開いていくこと、モノログに閉じた場をダイアログに開くこと、それこそオープンダイアログに他ならない。

オープンダイアログ / あらゆる声に対話を開いていくことのためにまずなすべきことは「患者であれ誰であれその発言に対して「応答」を返していくこと²²」とされる。「あらゆる陳述や発言は応答されなければなりません。発言と応答を結び合わせる対話の美学というものがある、それが対話を、聞き手がいない“モノログ”とは異なる“ダイアログ”へと導いてくれるのです²³」。どんな「おかしな」話、どんな「外れた」テーマ、誰の「場違いな」発話であっても、まずそれは聴かれる = 応答される = 受け入れられなければならない。拒否されてきた「別」の声はこの声として受け入れられなければならない。それまで権利を剥奪され生起する前にかき消されてきた「別」の声が取り戻されな

ればならない。どんな声も「ここの声」として生起し、受け入れられ、応えられなければならないのだ。誰もが、拒絶された/自らを拒絶した「他者」ではなく、私としてここに存在してよいのだ。

空間にポリフォニックな声を響かせるということ、ポリフォニックな声に場を明け渡すこと。つまりダイアローグを生起させるとのこと。その場をダイアローグ以外の場にしないうこと。

それはすべての「私」が、自らの内に閉ざしている私を聴く/開くということである²⁴。

その場をダイアローグの場にするというこの対話主義の原則が、治療チームに「治療者/観察者」というあり方を手放すことを必然的に求める。空間がダイアローグの空間でなければならないというこの規範が治療チームの位置づけを決定する/ダイアローグが治療チームのあり方を命じるのである。治療チームは「生身の一個人としてその場に臨む」、「発話と応答の相互のプロセスにおける一参加者²⁵」（傍点引用者）でなければならない。「対話」の場に「外部から治療的に介入する立場」や「同じ空間を共有しない中立的な観察者」の立場が持ち込まれてはならない。そうしたあり方はダイアローグの中にあるものではないからである。治療チームの「言葉づかい」もあり方も「一参加者/ダイアローグの仲間²⁶」としてのそれではなければならない。彼らはあくまでも一参加者となるために「まずはじめに治療チームはネットワークメンバーになじみのある言葉づかいを自分たちの発言に慎重に取り入れ²⁷」（傍点引用者）、医療者/観察者の言葉を放棄し、「普通の言葉」で話すのだ。それだけではない。あくまでも「生身の一個人²⁸」であるからこそ彼らは「その場で表現された感情に、自分自身の感情が共鳴²⁹」（傍点引用者）するという自然な、だが、通常は医療者/観察者としてはありえない、危険な反応すら受け入れるのである。「治療チームのメンバーは、そこで話された苦悩や困難の度合いに共鳴し、反応を返します。ときに治療チームは、ネットワークメンバーが絶望感を表明できるように促すことすらあります³⁰。これはセラピストが、患者の経験をポジティブに構築すべく、そうした言葉ばかりを見出そうとするような「解決志向型」のアプローチとは対照的な態度です³¹。…略…確実に言えることは、つらい感情を危険物扱いするのではなく、その場の自由な感情の流れのなかに解放したときにこそ、こわばって縮こまっていたモノローグがダイアローグへと変化を遂げるということです³²」。

だが「医師」としてのあり方を手放してダイアローグの一員として対話をしていくというこの「仕事」は、実はモノローグ化しようとする空間をダイアローグに開くという強力な「介入」である。

患者がこれまでその中に棲んでいた「網」はおそらくダイアローグを持っていない。その網のなかで患者は棲み、「別の声」を失い、病を発症してきたのである。そのネットワーク、つまり患者を「他者」にし、声を閉ざしてきたモノローグ的空間、その空間の中心/その空間を支配してきた力はまだ維持されているのだ。たとえ治療チームが目の前にいてもこれまで維持されてきたモノローグは絶えず元の形のまま再帰してこようとするだろう。セニックラは言う。「ときには声の大きなメンバーが、一方的な思い込みを他のメンバーに押しつけようとすることもあります。さらにありがちなのは、いくつかの対立

する考え方が、てんでに優位に立とうとしてぶつかり合うことです。…略…それぞれが自分の理解に頑にしがみつこうとするので、誰ひとりとして他者の言葉に真摯に応答したり耳を傾けようとはしなくなるのです³³と。これは場の「中心」=権力をめぐる争いであるとも言える。あるいは、そもそもモノローグ的空間は絶えずひとつの中心、ひとつの正解、ひとつのあり方を持ち、その中心に支配され、服従してきたものとも言えるだろう。その構造が既にメンバーに身体化されているのだ。だとすれば、この「中心に向かう/従う」力を治療チームは常に解体しなければならない。これをセックラは「脱中心化」と呼ぶ。

成功したオープンダイアログでは「治療者は、会話の複数のレベルで脱中心化をおこなっていました。分析してみた結論としては、〈ポストモダン〉の治療は他の治療モデルとは異なっていました。それは「あえて介入しないポジションをとる」というよりも、むしろ「積極的に脱中心化を目指している」ということです³⁴。斎藤環によれば、例えば治療チームは「中立的な立場から受容と傾聴に徹するのではなく…略…積極的に話題を広げたり迂回させたり³⁵」する。あるいはセックラは、ミーティングに「多声的ディスカール」を用いるとも言う。それは、ひとつの / 正しい / 中心の / 筋の通ったディスカールを建てていくのではなく、敢えて周縁の / 無数の / 矛盾する / 生起するディスカールに場を与えること / ずらすことでさえある。テーマだけでなく、話し方、言葉遣いにおいても「あるべき」それではなく、あるべきものではない形へ、「正しくあるべき」姿がこれまで支配し排除してきた「反・正しさ」が生起する可能性へと場は空けられる。セックラは言う。「私たちが理解するポストモダン理論においては、いかなるタイプのディスカールも使用を禁じられません。むしろそれは、いかなるディスカールに対しても、真理の主張を独り占めすることを許さない考え方は、あることを説明しようとして、究極的には相容れないはずの理論どうしを採用することだってありえます³⁶」。

ダイアログを生起させるために必要なこうしたモノローグ的空間への「介入」を、斎藤環は「去勢」と呼ぶ。「モノローグからダイアログへという展開は、はっきりと去勢のアナロジーでとらえることができます。万能感に満ちたモノローグを去勢することで、語る言葉は共有可能なダイアログへと開かれ健全化される³⁷」のである、と。

だとすればオープンダイアログにおいて治療チームがすることはただ、「モノローグを去勢すること」、閉ざされてきた声に場を与えること、そしてそこに生まれようとするダイアログを生起させ、それに従っていくこと「だけ」である。発せられるすべての言葉は全員によって聴かれ、応答される。「目的」も「正解」も「着地点」もないまま、それらが完全に開かれたまま、言葉は聴かれ、応答され、また次の言葉を生起させていくだろう。「治療チームの仕事は、このような、かつて語られたことのないような新しい意味を受け入れる余地を広げていくことなのです。…略…状況が共有され、そこに複数の声加わってくると、これまででない新たな可能性が生まれてきます³⁸」。

このようにして全員の、つまり「ポリフォニーを生み出す複数の主体」の間で、ダイアログは続けられていく。ダイアログは続けられるのだ。

このように、言葉の意味が応答に依存していることについて、バフチンは、対話の〈未完結性〉と呼んでいます。意味というものは、応答、応答への応答、それに続く

さらなる応答……といった予測不可能なプロセスによって、絶えず生成され変化していきます。そのプロセスは中断されることはあっても、決して完結することはありません。より多くの〈声〉が「ポリフォニック」な対話に組み込まれるほど、より創発的な理解が広がります³⁹。(傍点引用者)

オープンダイアログの“戦略”は、ダイアログ的な言説を構築することです。対話の中においてこそ、新たな理解が、人々のあいだの共有可能な現象として出現してきます⁴⁰。

支配するディスクールに対抗するディスクール、ひとつの声、ひとつの中心に反対する多声的＝ポリフォニックなディスクールを生起させていくこと、生起するポリフォニーに場を明け渡し、生起するポリフォニーに権利を与えることは、必然的に、対話の空間を、誰にも支配できないものに、ただ対話だけが支配するものへと変容させていこう。ダイアログのなかで生まれてくる新しいネットワークのなかで、治療チームとネットワークメンバーの全員がダイアログを共に構成したという経験のなかで、ダイアログにおいて全員がすべての声と感情を共有してきたという新しい関係のなかで、「連帯」が生まれる。そしてこの連帯において、ひとつの中心に再帰することを強いられる「モノログの袋小路」の代わりに絶えず「新たな理解」が、「新しい言葉」が、「新たな見方」が、「新しいナラティブ」が、「新たな意味」が、そして「新たな可能性」が生まれる。それは「新しい」としか言えないもの、これまでなかったもの、モノログ的に構成され与えられてきたものではないもの、生まれていくもの、まだないもの、これまでのネットワークを、これまでの「私」を越えていくものである。

そして「病」は癒えていくのだ。

かくして危機は、自己と世界を構成する物語、アイデンティティ、関係性といった“織物”を織り上げ、あるいは織り直すための、またとないチャンスとなるでしょう⁴¹。

そこにはただ対話がある / 対話が支配するのである。

2 討議倫理

ハーバーマスは次のように言う。

私は、次のような直感のすべてを「道徳的」と名づけたい。つまり、人格の極端な損なわれやすさ（あるいは傷つきやすさ）を配慮し、保護して、それに立ち向かうべくわれわれがいかに最善の態度をとるべきかということをわれわれに教えてくれるような直感がそれである。……言語能力と行為能力をもつ諸主体は、彼らがそのつど特殊な言語共同体の一員として、相互主観的に共有された生活世界の中へと発展的に入り込むことによってのみ、むしろ個体として構成されるものである。コミュニケーション的形成過程においては、個々人のアイデンティティと集団のアイデンティティ

とは等根源的に形成され、保持される。人称代名詞のシステムの登場によって、つまり、社会化されるべき相互行為の了解を志向するための言語使用には、個体化への強い強制力が組み込まれてもいる。とはいえ、日常言語という同じ手段を用いた場合には、個体化と同時に、社会化する相互主観性がおおいに働きもする。生活世界の構造が徹底的に分化してくればくるほど、個別化された個体の自己規定がいかにますます強力な統合性にまきこまれ、多様化された社会的依存性からめとられることになるかが、それだけはつきりしてくる。個別化が進めば進むほど、それだけ個別的主体は、相互に無防備なネットに、そしてまた危険の増した抵抗性という濃密かつ緻密なネットに陥っていくことになる。……以上のことから、アイデンティティのいわば構造的危機、慢性の脆弱さが証明できる。(14f. 傍点引用者)

道徳とは「人格の極端な損なわれやすさ」を配慮し、保護するものであるとハーバーマスは言う。ここで言われる「人格の極端な損なわれやすさ」とは、損なわれやすく傷つきやすい性格特性をもつ特定の人々を指すのではない。精神的／身体的に損なわれ傷ついた特定の人々だけでなく、この社会の中でごく普通に生きているわれわれのすべてが「極端に損なわれやすい」のだ。というのもわれわれは全員、社会の中に生まれ落ち、社会の相互関係の中で成長するからである。

われわれにとって社会の一員になること、つまり社会化することは必然である。社会化することはわれわれが「大人」になること、個別化＝主体化することでもある。われわれは社会に適合し、「大人」として社会の構成員にならなければ社会において生きていけない。だが同時に、われわれがここで「大人」になること、つまり社会化し社会の一員になることは、この社会の一員になること、自分が生まれ育ったローカルな共同体に適合し、その一員になることを意味する。別の言い方でいえば、この社会で「大人」になるということは、この社会のあり方に自己を同一化させ、この社会から与えられた価値・規範を身につけ、この社会に承認されるように自己を形成するということである。私が「大人」になるとは、私が私の「外」から、つまり私自身の共同体から私のアイデンティティとして付与される記号を私自身に貼り付けるということでもあるのだ。だとすれば、「主体化」するように／つまり「大人」になるようにとわれわれに対して働く共同体の強制力は、われわれをあくまでこのローカルな集団の一部に同一化する強制力だということになる。言い換えれば、この共同体の一員として共同体内在的価値を自らの上に体現して生きるか（これはわれわれが自らを疎外することを意味する）、さもなければこの共同体の中で生きることを放棄するか（これはわれわれが共同体から疎外されることを意味する）という二者択一の上で、われわれは「主体化」されていくのである。

こうした「主体化」においてなされる「自律」は結局のところ「他律の内面化」ではない。「私はどうすべきなのか」は常に既に与えられている。「私がどうすべきなのか」を自分で判断することのできる私は、「この共同体の中で私がどうすべきなのか」を私自身の選択に置換することのできる私なのである。だとすればこうした文脈での「私の主体化」は「私の植民地化」である。しかも私自身のこの「植民地化」／「受動性」は、私の主体「的」な身振りにおいて、あるいは私の「主体」的な引き受けにおいて、私自身にさえ隠されているのだ。

といっても、ハーバーマスが「ローカルな共同体」というもの一般を、あるいはこのローカルな共同体の—まさにモノローグ的な—コミュニケーション過程において形成される「主体」というものを廃棄しようとしているわけでは全くない。人の住む地球上のすべてがローカルな共同体で覆われ、各々の文化として現象するその共同体の伝統的な価値観や規範の上でこそ人々の暮らしが営まれているのだ。なによりもわれわれの誰もが何かのローカルな共同体のなかに生まれ落ちるのだ。ローカルな共同体は私を産み、私に世界観を与え、共同体のメンバーとしての、同時に他ならぬこの私としてのアイデンティティを私に与え、私を承認し、私を私として形成する母胎である。共同体の中に生まれ、その中で育つというあり方はわれわれの存在論的前提なのである。

ハーバーマスが言うのは、その当の共同体の中での主体化=同一化に際してコンフリクトが起きたときに（あるいはコンフリクトが起きる可能性があるときに）、これまで通用してきた共同体の伝統ないし価値・規範がこれまで通用してきたからという理由で正当化/棚上げされてはならないということである。別の言い方でいえば、これまで個人を同一化=主体化してきた共同体と個人の間でコンフリクトが起きたとき、つまり共同体の強制力のある「巻き込み」に対して個人がもはや適合できなくなったとき、そのときには共同体の一方的/モノローグ的な同調圧力に歯止めがかけられるべきだということである。その共同体の中での主体化=適合に同調できないとき、その個人は、その問題に関して、自らの共同体に対してノーと言ってよいのだ。

問題は、個人が自分の共同体に対してノーを言うことが限りなく困難だということにある。それは彼自身の世界であり、彼自身がそれまでは自明のものと信じて生きてきた彼自身の世界（生活世界）である。適合することができないことは、彼にとってみれば、その世界の問題なのではなく、適合できない彼自身の問題なのだ。

図式的に見れば、二つの段階があるということになるだろうか。

まず、人はある共同体の中に生まれる / その中で「いかにあるべきか」「どうすればよいか」を学び、それを身につける。彼が共同体の規範を体現し、それに同一化している限り、彼にとって「いかにあるべきか」「どうすればよいか」は彼にとって自明である。そうした段階にある人々のあいだで持たれるのは「倫理的-実存的討議」である。「倫理的-実存的討議においては、理性と意志は相互に規定し合っている。そこでは、意志はもっぱら主題とされてきた生活史的コンテクストに埋め込まれている。当事者は、自己了解の過程で、現に事実として存在している生活史と生活形態を変更することは許されない」(112f)。この段階では、自らの共同体から「あるべき」こととして彼の理性に与えられたことが彼にとって「自らがするべき」こととして引き受けられ意志されることである。この両者、外なる規範と内なる規範はまだ乖離していない。彼は「いまだテーマ化されていない自分の自己了解と世界了解に自己中心的に結びついたままの状態」であるが、彼の世界も、周囲の仲間との関係も、彼自身のアイデンティティも安定しているのである。

これに対し、コンフリクトが生まれたとき / 「あるべき」として共同体から与えられた自明の規範が彼にとってもはや「自らのするべき」こととして意志できなくなったとき、彼は初めて、「いかにあるべきか」「どうすればよいか」を問わなければならなくなる。それまでモノローグ的に個人の中に流れ込んでいた「共同体→個人」の一方的関係に「疑

問」という形での亀裂が生じる。それはもはや以前のように共同体から与えられる答で収束できるものではない。その問いはもはや共同体の中で解決される問いではない。なぜならその疑問は、共同体の答を個人が身体化するという「主体化」の構造それ自体にまさに向けられる問いだからであり、われわれを同一化することにおいて成立する共同体のあり方自体に向けられる逆行する問いだからである。しかもこの「亀裂」は単に共同体と個人の間だけに生じるものではない。亀裂は同時に彼と彼のそれまでの「仲間」との間に、彼と彼のそれまでの自明な世界の間、そして彼と彼自身のアイデンティティの間に生じるのだ。

まさにこの亀裂において「道徳的-実践的ディスクルス」が立ち上がる。それは「道徳的」である。なぜならそれは共同体の「中」で解決されない問いに向かうからであり、共同体の中で生じる「構造的暴力」としての同一化=「主体化」の問題を問う問いだからである。それは共同体内での「主体化」から導かれる「人格の極端な損なわれやすさ」を問う問いである。そしてそれは「実践的」である。なぜならこの問いは、まさにこの亀裂を自らの身体において生きている個人の上に生じるものだからである。この問いは、かつて安定していた「いかにあるべきか」の地平を既に失った個人が「どうすればよいのか」を生きる問いなのである。

彼のこの「問い」に応えることができるのは「与えられる別の答」ではなく、彼の「問い」を共に問うという応答である。

ハーバーマスは言う。

道徳的-実践的討議は、慣れ親しんできた具体的人倫のもつあらゆる自己了解と決別することを要求する。そしてまた、自分のアイデンティティがもつれて絡み合っているあの生活のコンテクストから距離をとることをも要求する。考えられる限りあらゆる可能な関与者が参加し、そのつど問題となる規範や行動様式の妥当性要求に対して仮の態度で臨み、十分な論拠を持って態度を決定することができること、このように普遍的に拡張された討議によるコミュニケーションの前提の下でのみ、各人のパースペクティブとあらゆる人のパースペクティブが交差して生まれるさらに高度な相互主観性が構成される。公正性という観点は、参加者の行為遂行的な態度との連結を保ちながら、各参加者自身のもつパースペクティブの主観性に制限を加えることになる。……道徳的-主観的討議は、それぞれわれわれのコミュニケーション共同体を、その内的なパースペクティブから理想的に拡張することを意味している。このようなフォーラム（もともとは市場や法廷として使われた古代ローマの公共広場を言う）を前にしてこそ、すべての当事者の共通の利害関心を代弁する規範を提案することができるのであり、この提案に基づいて根拠づけられた同意を得ることができるのである。（113 傍点引用者）

五四

ハーバーマスにおいて、このようにしてディスクルスの空間/フォーラムは立ち上がってくる。われわれを形成し、同一化=主体化してきた共同体の閉じたモノログ的空間は共に問う空間/アゴラへと開かれていく。問いのなかで、これまでは安定し閉じていた世

界了解と自己了解が揺るがされ / 動的なものに開かれていく。問いというかたちのこの亀裂のなかで、かつての共同体の同胞性と安定した仲間関係は失われる。同じ共同体の仲間として同じ地平を共有していた「われわれ」の共同性は、問いの生む亀裂において失われるだろう。しかし、まさにこの亀裂において、問いを共に問う新たな「連帯」が立ち上がってくるのだ。亀裂において生起するのは、ひとつの共同体のなかでの自明の、同一化した「われわれ」ではなく、共同体を超えた複数の / 異他的な「主体」によるわれわれである。

ハーバーマスは言う。

「重要なのは、モノローグ的志向の内面性から討議の公共性へというパースペクティブの転換ではなく、問題設定そのものの変更なのである。何が変わるのかと言えば、それは他の主体と出会うべき役割が変わるということでもある」(116)。

共同体の自明性を覆す問い、倫理的 - 実存的な共同体的あり方においては無視することも排除することもできる「理不尽な」問いを共に問うこと、共に問うというかたちで応答することは、応答する者の立ち位置を変える。

それはかつての「正解」を維持できなくなった / 道に迷った者を元の共同体の正解の地平の中に連れ戻すための応答ではない。その問いを共に問うことは、自らもまた彼と同じように安定した共同体の地平の外に出ること、共同体という故郷を捨てること、共同体という故郷を捨てたあり方を選択すること、そして彼の問いを自らの問いとして、自分たちの問いとして生きるという応答である。それは彼の場所 = 「問い」の場所 = 「外」に自らも立つという実践的な選択であり、あらゆる「中」の答を相対化するという道徳的な選択である。それは、故郷としての共同体において確固としたアイデンティティを獲得した者として、獲得したアイデンティティのすべてをかけて彼の問いとぶつかり、自らのアイデンティティの外へ、その自らの故郷である共同体の外へ、問いとともに / 彼の問いとともに漂流するという選択なのである。

彼の問いのなかで、私は、自らのアイデンティティを問いに付し / 自らのアイデンティティを失っていく / 自らのアイデンティティを脱ぎ捨てていく私として、共に自らのアイデンティティを問いに付し自らのアイデンティティを脱ぎ捨てていく彼に会う。それは「超越ないし自己の踏み越え (überschreiten)」(157) である。それは静的で固定的な「主体」から、運動するなにかへ、その都度目の前に出会う相手とのディスクルスにおいて共に動く主体へと「主体」を踏み越えていくことである。

ハーバーマスは言う。

五三

可能な限りすべての当事者が参加しうはずの相互主観的に展開される議論にして初めて、…略…さまざまな事態に対するそれぞれ私的な観点の持つ暗々裏の特権化は否定され、近代社会のもつ多元的な解釈のパースペクティブ、ならびに個人主義的な解釈のパースペクティブが、すべて協働し合うことが要求される。自由で同権的なパートナーたちによる包括的かつ強制なきディスクルスのコミュニケーションの前提の下では、普遍化原則は、関与者各人が他のすべての関与者たちのパースペクティブに我が身をおくことを要求する。同時にまた、それぞれの当事者は、それぞれの解釈のパースペクティブと、欲求の解釈とが適切であるかどうかを相互に批判し、そのこと

を基にして、そのつど自己の観点から、ある厳密な規範を普遍的な法則足らしめることができるかどうかの可能性を吟味し続けるのである。こうした理想的な役割取得、別な言い方をすれば、あらゆる解釈パースペクティブの脱境界化と可逆性とは、論議をするにあたり、普遍的なコミュニケーションの諸前提によって、はじめて可能になるとともに必要にもなってくる (157)。

ディスクルス = ダイアログは終わることはないだろう。

絶えず新しく出会うあらゆる彼と私は問いを共にしていこう。問いは絶えず立ち上がり、その問いの中で私は私の故郷から、私自身のアイデンティティからさまよって出よう。共同体の中で与えられた、限られた「正解」からより良い / 少なくともより広い解へ、対話のなかで私は彼とともに向かうことができるだろう。「境界なきコミュニケーション共同体というプロジェクトそのものが、真理の「無制約性」という永遠の契機（ないしは超時間的性格）の代わりをなす」(158) のである。

対話の中で、モノローグ的な植民地化の地平から、私は無限に解放されていけるだろう。

ディスクルスがそれをすべての「私」に可能にするのだ。

それは、私の「主体」からの解放なのである。

3 哲学カフェ

オープンダイアログとハーバーマスは綺麗に重なっている。

どちらも、ごく普通の日常のなかで生きる人々が、そのごく普通の日常を生きるために病んでしまうという「アイデンティティのいわば構造的危機、慢性の脆弱さ」を回復するものである。この日常から逸脱するからわれわれは病むのではない。この日常を生きるためにわれわれは病むのだ。特定の「弱い」人々が病むのではない。われわれのすべてが例外なく「そのつど特殊な言語共同体の一員として、相互主観的に共有された生活世界の中へと発展的に入り込むことによってのみ、むしろ個体として構成される」(既出、14f) ものであるかぎり、われわれはこの構成されたあり方に自らを同一化し、他ならぬ自分のこの共同体のなかで生きるために自分を失い続けるという負荷を負い、しかもその生き延びを続けるために自分自身がそうしていることを自らに閉鎖し、問うこと = 亀裂をいれることを自らに禁じ、そうすることによって決定的に自己を遮断（自己を疎外）しているのである。だとすれば、共同体に正しく「適応」して生きているわれわれ「普通の大人たち」がすべて未病としての病を抱えているのだともいえる。

この病 / 閉鎖を解除するものがオープンダイアログでありハーバーマスの「道徳的-実践的ディスクルス」である。ここでは、われわれは「正しく」なくてよいのだ。ここはむしろ、まさに共同体の日常の文脈のなかで自明なものとしてモノローグ的にわれわれを支配している「正しさ」/「正しい」振る舞いや発話の正当性を問い、これらの「正しさ」を再生産し続けている日常の倫理的-実存的ディスクルスに対抗し、そこに亀裂を持ち込み、自明性というかたちで働く力を「去勢」する場所である。それまで締め出されていたすべての声に権利 (right) が与えられ、すべての声が聞かれ / 応答される場所である。

まさにそのことをハーバースは「道徳的」と呼んだのだ。「私は、次のような直感のすべてを「道徳的」と名づけたい。つまり、人格の極端な損なわれやすさ（あるいは傷つきやすさ）を配慮し、保護して、それに立ち向かうべくわれわれがいかに最善の態度をとるべきかということのをわれわれに教えてくれるような直感がそれである」（既出、14f）と。

この「人格の極端な損なわれやすさ（あるいは傷つきやすさ）を配慮し、保護」するディスクルス＝対話、これをソクラテスに倣って「魂の配慮」と呼ぶとすれば、現代においてこの対話の場を産み出しているのが「哲学カフェ」である。

哲学カフェとは、1992年のパリから今日まで続く空間である⁴²。最初はたまたま街のカフェにいた哲学者であるマルク・ソーテ（Marc Sautet）を囲んで「愛とは何か」「死とは何か」などさまざまな議論が起きた。それが次第にそのカフェに一般市民が集まるようになる。最終的には、毎週200人もの市民が自らの問題を持ち寄り、哲学者と、あるいは他の市民たちと議論を交わすようになったという。

「カフェ」で生まれ、「カフェ」で続けられているからこの空間は哲学カフェと呼ばれているのだが、実は、「哲学カフェ」というのは、この空間の呼称であると同時にひとつのプロジェクト、ひとつの規範を示すものでもある。

いわゆるカフェの店舗で行われない場合でも、哲学カフェは「車座」という形をとる。一つの円であるか複数の円であるかを問わず、そこは円でなければならない。円には「上下」はない／そして円の中心には空白があるのだ。人々がそこに向かい、人々を支配する「中心」は空けられている。「中心」、つまり「正解」／「教師」／「権威」／「権力」はカフェでは排除されている。そしてその排除が円という形で指示されているのだ。この「円」のアフォーダンス、中心が空けられていることが自然と人々を動かすのである。この中心に空白を持つ円の空間を共有しているという関係が、人々の視線を中心から周辺へ、外在的で支配的な答から内的で／しかも共有しうる新しい問いへと促すのである。「カフェ」が「カフェ」であるためには特別な形が必要である。彼らが期待する「上下関係」を明示的に否定する仕掛け、否定を明示する「形」、「反-形としての形」、別の言い方をすれば「ここは教室ではない」「あなたは聞き手ではない」「ここには答はない」というパフォーマンスが必要なのである。

中心を空白に保つ仕掛けはほかにもある。

たとえば、参加者全員が固有名ないしその場だけで通用する呼称を用いる。呼ばれたい名前は参加者自身が選んでよい。姓で呼ばれたいという場合も、姓だけなのか「さん」「君」などをつけるのか、それも参加者当人が決める。ひとつの場に「大山さん」と「バンド」や「泉」がいるということもある。いわゆるファシリテーターとして参加する哲学者も「朝子ちゃん」や「こうちゃんパパ」などという呼称で参加する。こうした不揃いな「本人が呼ばれたい名前」での対話は、通常ならわれわれの共有する文化的背景によって有無を言わず決定される年齢・地位・性別などの外見による互いの立ち位置や関係性を攪乱する。当然、所属や立場をあらわす自己紹介は行わない。加えて、その場で用いる敬語の階層を揃える（全員が「です・ます」を使う、または全員が日常語で話すなど）。参加者の社会的地位や属性によってディスカッションが支配されてはいくら話しても対話に

はならない。

また、カフェの「主題」、話されるテーマを持ち込むのも参加者である。基本的には運営者が前もって準備したテーマではなく、その場で、集まった参加者の誰かが、「ここで話したいこと」を話し始め、そこからディスカッションが始まっていくのである。持ち込まれるテーマはどんなテーマでも拒否されない。また、ひとつではなく複数のテーマが始まってよい。複数のテーマを同時進行形でいくつかのグループに分かれて話し、全体でシェアするというかたちをとることもある。だが、最初は一見離れているように見えるテーマでも、話しているうちに自ずと背後に隠れている共通の問題が現れてくる。あるいは最初に全員で選択したひとつのテーマを話しているうちに、最初は選ばれなかったテーマが背景にあることに気づいていくことも多い。

だが、こうして全員で話していると、参加者たちが簡単な「正解」や「教師」による講義といった「権威」を求めることはよくある。参加者たちがこれまで習慣的にやってきたとおり「教室」に着地することを無意識に期待している場合もある。あるいはその場がいわゆる「倫理的-実存的ディスクルス」に支配される場合もある。あるいは年長者が自分の経験論で結論をつけようとするのも、大きな声で威圧しようとする参加者がいることも、あるいは自分の「豊富な知識」で他の参加者を黙らせようとする参加者がいることもある。だがそこが哲学カフェである限り、空間も、また関係も対話のために整えられなければならない。哲学者が参加するのはそのためである。そこにいる哲学者の役割は説明や講義ではなく、正解を与えることではさらになく、参加者の問いを引き出し、なにかしらの「答」に着地点を見出そうとする欲望を引き延ばし、さらに参加者の問いを構造化し、産み出し続けていくことなのだ。別の言い方で言えば、哲学者の役割とは、まさにかつてソクラテスがアテネの市民たちにそうしたように、すべての「正解」を転覆すること、参加者から提出されたあらゆる「答」が誤謬であること、「着地点」が着地点ではなく出発点であることを明らかに示すことにある。なぜなら、対話＝「道徳的-実践的ディスクルス」は、各人が問いの力によって今いる場所から動いていくことの中にしか生起しないからである。

これこそ哲学者による「介入」である。それは、共同体の強制力を、あるいは参加者がこれまで依存してきた「正解/常識」の強制力を「去勢する」ことである。ローカルなものでしかない共同体（共同体はすべてローカルである）がその圏内で絶対的なものとして各個人に強いる力の一方方向性に対し反省を加えること、そしてその力の圏内に巻き込まれている個人を解放することである。

五〇

このように哲学カフェは始まる。あるいは、こうして道徳的-実践的ディスクルスが立ち上がる。そして、そのなかで、それまで共同体の日常の倫理的-実存的ディスクルスのなかで自らを疎外し自らを封鎖してきた「大人」たちは、「正しさ」から、そして自分の軛から外されていくのである。

役割や属性を越えて誰とでも漂流を始めることができることを初めて体験し、しかもそのより良い問い/「新しい」場所を目指しての協働の漂流がお互いを解放していく誕生の

プロセスであることをおぼろげにでも確信することができれば参加者は勇気づけられる。実際、哲学カフェの参加者は「心が軽くなる」「世界が明るくなる」という。

共に解放されていく連帯のなかで人が何からであれ身を解きほぐすこと、おそらく自らの「主体」性から自分自身を解きほぐしていくこと、その鎖を外して魂が踊り出すこと、「主体」を新しい自分に、対話のなかで他者と共に流動していく関係に溶解していくこと。

オープンダイアログと哲学カフェの可能性は自分を越境していく同じ旅の空間に存在している。

*ハーバーマスの引用数字は以下のものである。

Jürgen Habermas, *Erläuterungen zur Diskursethik*, Ffm. 1991.

注

¹ 往々にしてこうした教師は、生徒が発言しないのは「生徒のせい」だと言う。彼らによれば、生徒の能力ないし「ゆとり教育」、あるいはさまざまな時代背景のせいで生徒の発話力が落ちた、その結果「生徒が発言しないから対話ができない」と言うのである。対話の場において「対話」を誘導/強制しようとする誘導者がそれに「乗らない」被誘導者に「対話が成立しない」責任転嫁をし、結果的に対立的関係を生んでいるケースは学校に限ったことではない。

² 斎藤環「オープンダイアログは精神科医療に何をもたらすか」、『精神看護』2015年9月号、医学書院、474頁。

³ 石原孝二「リフレクティングは予告なく始まった」、『精神看護』2016年1月号、医学書院、14頁。

⁴ 斎藤環「オープンダイアログは精神科医療に何をもたらすか」474頁。

⁵ 同上。

⁶ 同上。治療成績について斎藤は「この治療法を導入した結果、西ラップランド地方において、統合失調症の入院治療期間は平均19日間短縮されました。薬物を含む通常の治療を受けた統合失調症患者群との比較において、この治療では、服薬を必要とした患者は全体の35%、2年間の予後調査で82%は症状の再発がないか、ごく軽微なものにとどまり（対照群では50%）、障害者手帳を受給していたのは23%（対照群では50%）、再発率は24%（対照群では57%）に抑えられていた」という。これは医師にとっては「魔法のような数字」であると斎藤は述べている。（斎藤環『オープンダイアログとは何か』医学書院、2015年、11頁）。

⁷ 同上、10頁。

⁸ ヤーコ・セイックラ、メアリー・E・オルソン、斎藤環訳「精神病急性期のオープンダイアログによるアプローチ—その詩学とマイクロポリティクス」、『オープンダイアログとは何か』医学書院、2015年、82頁。

⁹ ここで言われる「詩学」は、アリストテレスが『詩学』悲劇論で触れたカタルシスによる精神の浄化作用を背景にするものだろう。それまで人々の心の中に溜まっていた澱が悲劇を通じて排出され浄化される。精神医学ではフロイトが同じくカタルシスを取り上げている。ここでもアリストテレスの概念と同様に、カタルシスによって患者の心的抑圧が意識化・除去され、症状が改善されることが精神療法の枠組みの中で論じられている。

¹⁰ セイックラ、オルソン「精神病急性期のオープンダイアログによるアプローチ—その詩学とミ

クロポリティクス」81頁。

¹¹ 西ラップランド地区の精神保健部門で1989年以降提供されているオープンダイアログに重点を置いた精神療法の研修の具体的内容については、片岡豊「職員教育 & 研修プログラム」、『精神看護』2016年1月号を参照。

¹² セイックラ、オルソン「精神病急性期のオープンダイアログによるアプローチ—その詩学とマイクロポリティクス」88-89頁。

¹³ 同上、90頁。

¹⁴ ヤーコ・セイックラ、斎藤環訳「精神的な危機においてオープンダイアログの正否を分けるもの—家庭内暴力の事例から」、『オープンダイアログとは何か』医学書院、2015年、125頁。

¹⁵ ヤーコ・セイックラ、デイヴィッド・トリンプル、斎藤環訳「治療的な会話においては、何が癒やす要素となるのだろうか—愛を体現するものとしての対話」、『オープンダイアログとは何か』医学書院、2015年、150頁。治療チームの間での「打ち合わせ」や「相談」もその場で行われる。これが「リフレクティング」と呼ばれるものだが、まさにネットワークメンバーの見ている前で、治療チームの間だけで行われる透明なミーティングである。ネットワークメンバーは、治療チームのミーティングを見ることによって、他者の言葉によって語られた自分たちの状況を改めて「他の目で」振り返ることになる。

¹⁶ 斎藤環『オープンダイアログとは何か』医学書院、2015年、24頁。

¹⁷ セイックラ、オルソン、「精神病急性期のオープンダイアログによるアプローチ—その詩学とマイクロポリティクス」94頁。

¹⁸ 同上、93-94頁。

¹⁹ セイックラ、「精神的な危機においてオープンダイアログの正否を分けるもの—家庭内暴力の事例から」142頁。

²⁰ 斎藤環はこのことをシステム論の視点で説明している。「ルーマンは人間の心的システムと社会システムとは「構造的にカップリング」していると述べました。これは、互いに互いを環境とし合うような関係で、決して融合することはないが、にもかかわらず一方が欠けると一方が消えてしまうような関係性を指しています。…略…（治療チームやネットワークの）メンバーはダイアログ・システムの「環境」です。この環境のもとで、オープンダイアログ・システムはダイアログを再生産します。…略…治療はオープンダイアログというシステムの“廃棄物”として生成するのです」。斎藤環『オープンダイアログとは何か』56頁。

²¹ セイックラ、「精神的な危機においてオープンダイアログの正否を分けるもの—家庭内暴力の事例から」132頁。

²² セイックラ、オルソン「精神病急性期へのオープンダイアログによるアプローチ—その詩学とマイクロポリティクス」96頁。

²³ 同上。

²⁴ ここにはまさに、世間のなかで受け入れられるかどうかを絶えず怖れ、不安に満ち、自分を世間に合わせて形成 = 阻害してしまうハイデガーの「現存在」の構造がある。ハイデガーにおいてもこの「現存在」は可能性としての「本来的存在」を持ち、その「本来的存在」に開かれなければならないものとされた。そして「本来的存在」を開くものは、ハイデガーにおいて「聴く」ことなのだ。

²⁵ セイックラ、トリンプル「治療的な会話においては、何が癒やす要素となるのだろうか—愛を体現するものとしての対話」159頁。

²⁶ 同上、161頁。

²⁷ 同上、162頁。

²⁸ 同上、164頁。

²⁹ 同上。

³⁰ 同上。

- ³¹ 同上、165 頁。
- ³² 同上、164-165 頁。
- ³³ 同上、160 頁。
- ³⁴ セイックラ「精神病的な危機においてオープンダイアログの成否を分けるもの—家庭内暴力の事例から」129 頁。
- ³⁵ 同上。
- ³⁶ セイックラ、トリンプル「治療的な会話においては、何が癒やす要素となるのだろうか—愛を体現するものとしての対話」168-169 頁。
- ³⁷ 斎藤環『オープンダイアログとは何か』58 頁。
- ³⁸ セイックラ、トリンプル「治療的な会話においては、何が癒やす要素となるのだろうか—愛を体現するものとしての対話」163 頁。
- ³⁹ 同上、158-159 頁。
- ⁴⁰ セイックラ「精神的な危機においてオープンダイアログの成否を分けるもの—家庭内暴力の事例から」123 頁。
- ⁴¹ セイックラ、オルソン「精神病急性期へのオープンダイアログによるアプローチ—その詩学とマイクロポリティクス」95 頁。
- ⁴² これについては、拙論「ソクラテス・サンバ・カフェの作り方」、『サイエンスコミュニケーション』2014 年 Vol.3、日本サイエンスコミュニケーション協会を参照のこと。

*本論文は、MEXT 科研費 [課題番号 26370006] の助成を受けたものである。

Open Dialog, Socratic Dialog, Harbermas' Communication Theory

Sachiko IGARASHI

It is commonly believed that only dosage-treatment is necessary by treatment of schizophrenia. However, only dialog without any medicine can heal that severe symptom. This treatment is called “Open dialog” that was created in Finland in 1980's. At the same time, one philosophical attempt was born in Paris that was called Socratic dialog. Both of them have possibility to response to one of the most difficult problems composed by contradiction between self-alienation and socialization. Harbermas' communication theory explains why dialog resolves that problem. According to him, our dialog-level has two dimension, one is “ehical-existential-discussion” and the other is “moral-practical discussion”. In “ehical-existential-discussion” one is educated and alienated, and in “moral-practical discussion” one can get self-fulfillment or mindfulness and recover themselves and “true” solidarity. Here we found that “Open dialog” and Socratic dialog have these two leveled-constructions of dialog and this is the only “mercumar” of true / false dialog. These observations indicate that true dialog can mediate long-lived, adaptive recall responses independent of “self”.